

サンクタ・マリアとしての白磁製観音像 ——潜伏キリシタン伝来の「マリア観音」をめぐって

宮川 由衣

はじめに

1614(慶長19)年に徳川幕府による禁教令が出されたのち、1873(明治6)年にキリシタン禁制の高札が撤去されるまで、およそ250年にわたってキリシタンの迫害と潜伏の時代が続いた。この間、キリシタンたちは表面上仏教徒であるように装い、中国または国内で作られた白磁製などの観音像を「ハンタマルヤ」と呼び、密かにこれを信仰の拠りどころとした。これらの像は一般的に「マリア観音」¹と呼ばれている。

今日、各地の博物館で「キリシタン資料」と称されるものが所蔵されている。これらの資料は、歴史学、考古学、美術史学などによる成果に基づく実証性のあるものが原則であるが、確証のない真偽を疑うものも「キリシタン資料」として取り扱われていることがある²。マリア観音像の場合も、後世に作られた模造品が多く出回っており、潜伏キリシタンによって所持、崇敬されたことが確実なものはほとんどないのが現状である。こうしたなか、現在、東京国立博物館で所蔵されている長崎奉行所による没収品は確かなものとして知られている。

東京国立博物館所蔵のマリア観音像は、1856(安政3)年に肥前国彼杵郡浦上村(現在の長崎市の一部)で百姓の吉蔵を中心とする潜伏キリシタン15名が一斉検挙された事件、浦上三番崩れ³の際に没収されたものである。浦上三番崩れでは、白磁製の観音像を含む多くの信仰物が長崎奉行所に没収された。長崎奉行所で保管されていたこれらのキリシタン関係遺品は、明治に入ると長崎県から教部省に引き渡され、内務省社寺局を経て帝国博物館(現在の

東京国立博物館)に移管された。現在、これらは国指定の重要文化財となっている。これらの没収品の中には白磁製のほかにも陶製、青磁製、土製などの観音像があるが、東京国立博物館のキリシタン関係遺品の目録では、白磁製のもののみが「マリア観音」という名称をもつ⁴。これらは17世紀に中国・福建省の徳化窯で作られたと考えられている。

また、「マリア観音」とは一般的に、禁教下にキリシタンたちが表面上仏教徒を装うために信仰し、仏教の観音像に聖母マリアを見立てて拜んだものであると言われてきた。しかし、近年の研究ではこうした従来の見方が見直され、「中国から日本にもたらされた観音像は、聖母マリアとしてキリシタンたちの手に渡っていた可能性がある」という説が新たに提出されている。

そこで、本論でははじめに1856(安政3)年の浦上三番崩れの記録から、この摘発事件の際に「異仏」として没収された東京国立博物館所蔵のマリア観音像の由来を確認する。これらの像は潜伏キリシタンによって「ハンタマルヤ」と呼ばれ、彼らの祈りの生活と共にあった。また、浦上三番崩れの没収品のほかにも、禁教下に没収を免れたマリア観音像が存在することに注目し、その記録を確認する。そして、いわゆる「マリア観音」、すなわち中国から伝来した外見上は観音像である白磁製の像が、どのようにして潜伏キリシタンの手に渡り、「ハンタマルヤ」として崇敬の対象となったのかについて考察したい。

1. キリシタン摘発事件と異仏没収——東京国立博物館所蔵のマリア観音像

東京国立博物館の『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』には、白磁製マリア観音像37体と白磁製マリア観音像断片2点、そしてマリア観音像等破片付札3点が挙げられている。東京国立博物館所蔵のキリシタン関係遺品は、1856(安政3)年の浦上三番崩れや1867(慶応3)年の浦上四番崩れで浦上村のキリシタンたちが検挙された際に、長崎奉行所が没収し、保管していたものである。すでに述べたように、これらの没収品のうち白磁像のみが「マリア観音」という名称をもち、その他の陶製、青磁製、土製などの像は「観音菩薩立像」や「観音菩薩坐像」とされ、区別されている。

田北耕也氏は『昭和時代の潜伏キリシタン』(1954年)において、潜伏キリシタンを(1)「納戸神を中心とする平戸・生月地方」と、(2)「日繰帳を中心とする長崎・黒崎地方と五島地方」の二つに分けている⁵。このうち、マリア観音像は、後者の地方に伝わるものである。片岡弥吉氏は『かくれキリシタン——歴史と民俗』(1967年)の中で、「マリア観音」について、「これらの観音像は多くシナ焼きで、純粹の仏像として日本に渡来したものが、潜伏時代のキリシタンたちに、サンタ・マリアとして祭られたものであった。[……]観音像すなわちマリア観音なのではなく、サンタ・マリアのイメージを求めて禁制時代の潜伏キリシタン、或はこんにちのかくれキリシタンたちが祭っていたという由緒があって始めてマリア観音たり得る」としている⁶。

ところで、「マリア観音」という呼称は、潜伏キリシタンが用いていた言葉ではなく、後世の研究者たちが呼び表したものである。「マリア観音」という呼称については、キリシタン遺品研究の先覚者である永山時英氏が『切支丹史料集』(1892年)の中で、東京帝室博物館所蔵の像を「マリア観音」と書いたのが最初であろうと言われている⁷。永山氏は先の『対外史料美術大観』(1885年)においては、「白磁観音」とのみ書いていることから、このあいだに呼称が変化し、

これがその後定着したものと考えられている。

それでは、潜伏キリシタンたちは、外見上は観音像であるこれらの白磁製の像をどのように称していたのであろうか。浦上三番崩れについて、長崎奉行所が作成した記録『異宗一件』には、潜伏キリシタンたちが先祖代々受け継いできた「ハンタマルヤ」と称する白焼の仏を所持し、それを信仰していたと記されている⁸。このうち、当時の浦上村潜伏キリシタンの指導者であった吉蔵の口述には、「先祖共より持伝信仰いたし来候ハンタマルヤと申す白焼仏立像一体」とある(図1)。また吉蔵は、「アベマルヤ天ニマシマスと申経文相唱」と述べている。さらに、「世界の諸物其恩愛を不受して成育いたし候もの無之、右故信心いたし候ものは現世にて田畑作物出来方宜敷、其外諸事仕合能、諸願成就、福徳延命、来世は親妻子兄弟一同パライソ江再生いたし無限歡樂を得候承伝右様恵深き事故一途にハンタマルヤを念し」とある。すなわち、「ハンタマルヤ」の恩愛によって、すべてのものが生成されているのであり、これを信仰する者は現世でも来世でも利益を与えられるという。また、同じく浦上村の龍平も、「先祖共より持伝信仰いたし来候由の白焼ハンタマルヤ座像二体」を所持すると答えている。

この摘発事件で多くの白磁製の観音像が発見されたが、「切支丹が盛んであった土地がらなので、このような仏が残っているのを先祖が隠しておいたのであろう」という村人の申し立てが認められ、また、



(図1)『異宗一件』、1860(萬延元)年、長崎歴史文化博物館所蔵

絵踏も年々行い、先祖の年忌や弔いなども変わったところはないという理由で、像没収の上、1860(萬延元)年までには皆釈放となった。キリシタンが所持していたこれらの像は、臨濟宗春徳寺の僧侶・禎禪と曹洞宗皓台寺の僧侶・廓菴によって鑑定が行われた。その結果、「ハンタマルヤ、イナッショと申唱候仏は観音の像」と判断され、「邪宗仏(キリシタンの仏)」とは認められず、「異仏(異様の品)」として処理された。報告書には、「宗名は異宗と申伝え、本尊はハンタマルヤと申す」とある。現在、東京国立博物館に所蔵されているマリア観音像37体は、この際に没収されたものであり、「安政3年長崎奉行所に収納」と記録されている。

また、先に見た浦上村中野郷吉蔵の口述には、「アベマルヤ天ニマシマスと申経文相唱」とあった。これにより、キリシタンのあいだで聖母マリアを讃える天使祝詞が伝えられてきたことがわかる。さらに、彼らはキリストの降誕や受難、そして復活について伝え、指導者である惣頭の日練りによって、それらの祝日を祝っていたという。1865(慶応元)年に浦上村で最初に発見された「天地始之事」と題される写本には、「マルヤ」についての物語が記されている⁹。その内容は、天地創造、人間の墮落に関する旧約聖書と、イエスの誕生、聖母マリアの生涯、そして世界終末と審判にいたる新約聖書をつないだキリスト教の教本である。キリシタンのあいだで書き写されて流布していたというこの写本は、五島や長崎でも発見されている。そして、この中の「さんた丸屋御かん難の事」というくだりでは、「丸や」について次のように記されている。るそん¹⁰の国に「丸や」という娘がおり、一生純潔の誓いをたてるが、彼女を見染めたるそんの国の帝王により、妻となることを強制される。王は財宝のかぎりを示すが、「丸や」はこの世の宝は無意味だと言って、これを拒む。そして「丸や」は6月であるのに雪を降らせ、王のもとから逃れて畑の麦の中に身を隠し、やがて天から迎えの花車があった。その後、地上にもどった「丸や」に受胎告知がある。この「丸や」話には、『黄金伝説』で語られる様々な聖女伝が混在している。

そして、長い潜伏期を経て、キリシタンたちが再び西欧から日本にもたらされた聖母マリアの像にまみえる日が来た。開国後の1865(元治2)年、プティジャン神父によって建立された長崎の大浦天主堂の祝別式が行われた一カ月後、浦上村の12名から15名ほどの老幼男女が天主堂を訪れ、一人の女性が神父に尋ねた。「サンタ・マリアの御像はどこ」と。彼女は聖母マリアの像を見て、「ほんとうにサンタ・マリアさまだ。御子ジェス様を抱いていらっしゃる」と言った。今日「信徒発見」として伝わる潜伏キリシタンの存在が顕わになった瞬間である。この出来事について、浦川和三郎氏は『切支丹の復活』(1927年)において、ローカニユ神父の書簡を引用している。そこには、「浦上の信者たちは聖母マリアの聖像を心から尊敬して、善かサンタ・マリア様と呼んでいる」と記されている¹¹。

現在、東京国立博物館に所蔵されている白磁製のマリア観音像は、禁教下にキリシタンたちが「ハンタマルヤ」と呼び、祈りの生活と共に先祖代々受け継いできたものであった。キリシタンが用いた「ハンタマルヤ」という名は、宣教師によって伝えられた「サンタ・マリア(聖母マリア)」の呼称に由来するものである。そして、開国後に再び西欧からもたらされた聖母マリアの像を前にしたキリシタンたちは、これを「善かサンタ・マリア様」と呼び、禁教下に彼らが信仰のために用いた白磁製の観音像と同じ「マルヤ(マリア)」の名で尊んだ。

マリア観音を「異仏」として没収された浦上村のほかにも、「マルヤ」と呼ばれる白磁製の観音像が伝わる地域があり、それぞれの呼称が伝わっている。たとえば、筑後今村地方(現在の福岡県三井郡大刀洗町)のキリシタンは、マリア観音を「マルヤ仏」と称し、取り調べ記録には漢字で「丸野仏」と記されている¹²。そこで次節では、浦上三番崩れの際に「異仏」として没収され、現在東京国立博物館に所蔵されているマリア観音像のほかにも「マルヤ」として伝わる白磁製の観音像が存在することに注目し、禁教下に没収を免れたマリア観音像についての記録を確認したい。

2. 禁教下に没収を免れたマリア観音像

西村貞氏による『南蛮美術』(1958年)は、『日本初期洋画の研究』(1945年)と並び、キリシタン美術の研究を推し進めた大著である。その中で、「マリア観音」に関して、以下のような記述がある。

五島や生月島のはなれキリシタンが、いまもつたえる白磁のマリア観音像は大部分シナよりの輸入品で、日本製のマリア観音は例外なく近年の模造品とみてよい。またそれと並行して可なり^{おびただ}夥しい作品が、国内でも日本人の手で制作されたわけでもあるが、残念ながら、その大部分は亡び去ったものと考えて大過あるまい。¹³

このような見方について、当時キリシタン資料の模造品が多く出回っていたことがその背景にあると考えられる。実際、キリシタン資料をめぐることは、確証のない真偽を疑うものが流布していることはすでに述べたとおりである。日本が禁教政策を行っていたことは各地で知られており、このような特異な禁教政策が外国人コレクターの興味対象ともなっていたのである¹⁴。こうしたなか、潜伏キリシタンたちが信仰していた信仰物を模した外国人向けのお土産が数多く作られた。このようなお土産が作られたのは、外国人からの需要があったためであるが、実際、1874(明治7)年にキリシタン資料が一括して長崎県から教部省に引き渡されたのも、フランス人が購入希望したことを受けての措置であった¹⁵。さらに、稀少なキリシタン資料の原物が古物市場において高値で取り引きされていたことも、後世の「模造品」を生む要因となった。

こうした「模造品」が多く流布していることから、文献資料により裏がとれない場合、マリア観音像を絶対的な真正資料として扱うのには慎重になる必要がある。資料の裏付けをめぐることは、その資料の裏付けが先祖代々の言い伝え(口伝)でしかないもの、あるいは元来キリシタンで潜伏時代を過ごしてきた直系家族に伝わるものもあれば、親類や知人、

さらには古物商の手に渡ったものもあり、資料的裏付けを困難にしている実情がある¹⁶。西南学院大学博物館が所蔵するマリア観音像(図2)は、浦上村の潜伏キリシタンが没収を免れて所持していたものであり、長崎バプテスト教会に寄贈されたことに由来する。その寄贈主は、代々浦上村でキリシタンであった家である¹⁷。また、作例も東京国立博物館所蔵のマリア観音像と一致することから、極めて確実性が高いキリシタン資料であると言ってよい。

このように、禁教下に没収を免れ、信者によって伝えられてきたマリア観音像が存在することは、文献資料によって確認することができる。田北耕也氏は『昭和時代の潜伏キリシタン』(1954年)において、長崎・黒崎地方に伝わるマリア観音像について記している。これによると、原爆の時まで浦上天主堂に所蔵してあった多数のマリア観音像は善長谷から発見されたもので、高島からも数個出た事があり、東嶺山では本書に掲載されている写真のマリア観音像が1931(昭和6)年に現存していたという¹⁸。長崎市の方、野母半島の中央に善長谷——「ゼンチョ」とはラテン語のgentilis(異教徒)に由来する——という部落があったが、幕末にここで宣教師が再布教を行い、1883(明治16)年頃に全部落一致してカトリックの洗礼を受けている¹⁹。1918(大正7)年、この部落の一軒の家の屋根のふきかえが行われた際に、天井裏からマリア観音十数個や公教要理のブ



(図2)〈マリア観音像〉、17世紀、西南学院大学博物館所蔵

ティジャン版などが発見された²⁰。かつて浦上天主堂に所蔵してあったマリア観音像は再布教期にカトリックの洗礼を受けた信徒に伝わっていたものと見られ、「御像」の多くは、今はマリア観音ではなく、金属製のキリストやマリアの像、またはその画像、ロザリオやその破片であるという²¹。ここで田北氏が記している「原爆の時まで浦上天主堂に所蔵してあった多数のマリア観音像」について、当時の浦上天主堂の史料陳列室の様子を伝える写真が残っている(図3)。ここには、白磁製と見られるマリア観音像数体が確認できる。

また、『キリシタンの美術』(1961年)においても、善長谷の信者宅から発見された旧浦上天主堂所蔵のマリア観音像について記されている。これらについて、「実際に信者の家に匿され、かつマリア像に見立てて崇敬されていた事実があきらかに証せられる品である」²²とされている。外見上は観音像であるこれらの像が、どのようにして潜伏キリシタンの手に渡り、「ハンタマルヤ」として崇敬の対象となったのであろうか。次節では、白磁製観音像の製造と伝播について見ていきたい。



(図3)『絵葉書・浦上天主堂内史料陳列室ノ一部』、長崎歴史文化博物館所蔵

3. 白磁製観音像の製造と伝播

東京国立博物館所蔵の白磁製観音像は、いずれも17世紀、明から清にかけて、中国・福建省南部に位置する徳化窯で製造されたものであると記録されている²³。徳化窯は中国有数の窯業地として隆盛し、一般的に17-18世紀がその最盛期とみなされている。徳化窯産の白磁は素地のガラス化の度合いが高く、光沢や潤いのある質感を呈すという特徴をもつことから、ヨーロッパでは「ブラン・ド・シーヌ(Blanc de Chine, 中国白)」と称され、国内外で高い評価を受けた。徳化窯は特に磁器像の製造で知られており、『天工開物』(1637年／崇禎10年)には、「徳化窯、惟以焼造瓷仙精巧人物玩器(徳化窯はただ仙人や精巧な人物像などの賞玩具を焼造している)」と記されている²⁴。

また、徳化窯と並び、白磁製観音像の制作地であった可能性が指摘されているのが中国・江西省景德鎮窯である。18世紀はじめに布教のために景德鎮を訪れたイエズス会士ダントコール神父は、景德鎮窯の様子を記録している。『中国陶瓷見聞録』として刊行されている本書は、1712年の第一書簡と1722年の第二書簡から成り、ここにおいてダントコールは、当時、景德鎮では観音像が多く制作されていたと記している²⁵。現在、国内にある白磁製観音像のうち、景德鎮で焼かれたものとはっきりと分かっているものはないが、制作地については慎重に見定めていく必要があるだろう²⁶。

さらに、中国・徳化窯産とみなされている白磁像の中には国内産の三川内焼が含まれている可能性がある。東京国立博物館所蔵の没収品の中には、三川内焼だとする付属書簡——ただし付属書簡は伝存せず——を伴っていたという白磁像も存在する²⁷。江戸時代、現在の長崎県佐世保市で生産された三川内焼(平戸焼)は、良質な陶石に恵まれたことにより、徳化窯同様、白磁が非常に美しく、細工物を得意としていたことで知られている²⁸。

これらの白磁製観音像は、どのようにして潜伏キリシタンの手に渡ったのであろうか。まず、白磁製

観音像の生産地の中心であった徳化窯がキリシタンからの注文を受けた可能性についてであるが、今日明らかに日本からの注文品であると認められる徳化窯磁器は知られていない²⁹。さらに景德鎮窯磁器については、江戸時代に日本からの注文で作られた古染付などの磁器の一群が伝世しているものの、その注文主は、江戸時代初頭では大名茶人である小堀遠州周辺の人物と考えられており、江戸後期でも大寺の高僧や富農、豪商が中心である³⁰。一方、浦上村の潜伏キリシタンたちは、指導者であった吉蔵ですら石高が一石にも満たない農民であり、市場規模が小さく経済力もなかった潜伏キリシタンが白磁製観音像を注文できた可能性は低いと考えられている³¹。

他方、中国で作られた白磁製観音像が聖母マリアの像として潜伏キリシタンたちの手に渡った可能性は考えられないだろうか。若桑みどり氏は『聖母像の到来』(2008年)において、先述の浦川和二郎氏の『切支丹の復活』(1927年)でキリシタンたちが、開国後に宣教師が再び日本にもたらした聖母マリアの像を「善かサンタ・マリア様」と呼んでいたという記述に注目している。そして、「キリシタンたちは、いわゆるマリア観音像を観音とは思っていなかったのではないか」として、「キリシタンたちが観音をマリアに見立てて拜んだ」という従来の見方に対して疑問を呈している。さらに、今日「マリア観音」と言われている像は、「東アジア型聖母像」、すなわち「日本および中国のキリシタン教徒が創造した、独自の聖母マリア像である」と説き、「キリシタンたちは、仏教の像にマリアを見立てて拜んだのではなく、この像そのものをマリアとして崇敬したのである」と述べている。

若桑氏は、16世紀後半にはじまるキリシタン教の中国布教において、西欧の聖母マリア像が、意識的にアジア化された可能性がある」と指摘する³²。中国に渡ったイエズス会士マテオ・リッチは神宗皇帝と皇太后に聖母像を献上した。この絵はローマのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂にある「聖ルカの聖母」の写しであったと言われており、北京宣武門の内に建てられた天主堂に祀られていたことが知られ

ている。現在、シカゴのフィールド美術館に所蔵されている《中国風聖母子》(図4)は、ヴェールをまとった聖母、書物を持って右手で祝福を与えるイエスなど「聖ルカの聖母」と同型であるが、衣服や子どもの髪型などが中国風になっている。1910年に中国・西安府で本図を発見したラウファーは、これがリッチの監修によって中国化された聖母マリア像であると指摘している³³。若桑氏はこの絵を挙げ、「ここにおいて、すでに中国における聖ルカの聖母の明らかな東洋化が起こっている」とし、さらにこの絵が、「日本に持ってこられた白磁の観音像ときわめてよく似ている」と指摘する。そして、「このことが偶然でないとすれば、リッチは中国の観音に似せて東洋の聖母を描かせたのである」と述べている。

また、中国における白磁製観音像の製造と伝播について、「福建省はキリスト教宣教師やキリスト教徒の往来が多く、窯元がみずから、マカオ、フィリピン、日本のキリスト教徒のために、輸出品として、十字架やロザリオのついた白磁の像を製造した可能性もある」と指摘している。以上のことから、若桑氏は「1614年に禁教下に入った後、日本の信者が、明末期において、リッチの影響下に制作された東洋風の衣装と子どもを抱いた聖母像を、唐船によって輸入したという可能性は否定できない」とする³⁴。



(図4)《中国風聖母子》、明代末期
シカゴ、フィールド美術館所蔵

江戸幕府の禁教政策下において表立って信仰することが許されなかった潜伏キリシタンたちが、みづから信仰物にキリスト教的意匠を含むものを注文して作らせたとは考えにくい。しかし、中国で制作され、すでに聖母マリアのイメージと結びついていた白磁製観音像を、潜伏キリシタンたちが「観音」としてではなく、「ハンタマルヤ」として受容し、密かにそれを信仰の拠りどころとしたと考えることはできるだろう。そこで、潜伏キリシタンの手に渡った白磁製観音像が、マリアに見立てられた「観音」=「マリアの代替」ではなく、「ハンタマルヤ」=「マリアそのもの」であったという見通しのもと、考察を行いたい。

4. ブラン・ド・シーヌの観音像——聖母マリアと観音のあわいで——

17-18世紀にかけて中国・徳化窯で製造された白磁は、国内外で流通し、ヨーロッパでは「ブラン・ド・シーヌ(Blanc de Chine, 中国白)」と称された。ブラン・ド・シーヌの白磁製の像は、今日アメリカやヨーロッパ各地の美術館、博物館で所蔵されている。海外に輸出されたブラン・ド・シーヌをめぐる研究——Donnelly, P. J. *Blanc de Chine: the porcelain of Têhua in Fukien*, Faber, London, 1969——によって広く紹介された。本書において、ドネリーはブラン・ド・シーヌの白磁製観音像の中に、その数は多くないものの、キリスト教の影響が見られる像が存在することについて言及し、17-18世紀にかけて制作された4点の像を紹介している³⁵。ドネリーは、そこに見られるキリスト教の影響は、「カルヴァン派の影響下にあった17世紀オランダではなく、明らかにポルトガルあるいはイエズス会のものである」と指摘している³⁶。当時、ポルトガルは中国においてはオランダにその地位を取って代わられたが、マカオでは地盤を保持していた。こうしたなか、1675年から1725年に制作されたとされる聖母子像(図5)は、特に聖母と幼児の像における巻き髪表現が注目される³⁷。ここでは、通

常、本や水瓶が置かれる位置に、巻き髪の聖ヨハネの像が見られる。他方、聖母子の左右に配された従者の像は、中国人風の容貌で表現されており、この像において中国と西洋の要素が混在していることがわかる。

このように左右に従者を伴い、玉座に座る観音像は、1655年に制作された17世紀オランダを代表する地図製作者ブラウによる中国・雲南省の地図——*Novus Atlas Sinensis 1655*——の周辺部の挿絵に描かれている(図6)³⁸。ここでは、玉座の左右に水瓶と鳥が配されており、とりわけ従者の一人が衣や髪型の表現において西洋人風の容貌で描かれていることが注目されよう。2002年の展覧会図録に収録されている17世紀前半から中頃の制作とされるブラン・ド・シーヌの白磁製観音像(図7)は、この図に近い作例として紹介されている³⁹。これと同型の観音像は日本にも多く伝来しており、東京国立博物館所蔵の浦上三番崩れの没収品にも20点含まれている。そして、これらの像のいくつかは、西洋人風の容貌で描かれた従者や水瓶のモチーフ——洗礼との関係からキリスト教の図像からの影響が窺われる——を含んでいるのである(図8-9)。



(図5)《聖母子像》、1675-1725年



(図6) ブラウ、中国・雲南省地図(部分)、1655年



(図7)《観音像》、17世紀前半中頃、リッチモンド、バージニア美術館所蔵



(図8)《マリア観音像》、17世紀、東京国立博物館所蔵



(図9)《マリア観音像》、17世紀、東京国立博物館所蔵

さらに、ゴデンによる研究——Godden, G. A. *Oriental Export Market Porcelain, and its influence on European wares*, Granada, London, 1979——では、18世紀初頭のイギリス東インド会社(The East India Company)の販売記録からブラン・ド・シーヌの国外への流通の実体が明らかにされている⁴⁰。ここで注目すべき点は、イギリス東インド会社の販売記録に、日本の潜伏キリシタンが用いたのと同じ、Sancta Mariaという言葉がしばしば記載されていることである(図10)⁴¹。先に見た像のように、ヨーロッ

パの聖母子像の影響が窺われる作例は一部例外的に存在するものの、当時ヨーロッパに輸出された白磁の観音像の多くは、日本のキリシタンたちが所持していたものと同じ型、すなわち観音が子どもを抱く、典型的な観音像であった。そして、これらがイギリス東インド会社の販売記録においては、Sancta Mariaと記載され、国外に輸出されていたのである。これについて、ゴデンは「これらは西欧に輸出され、販売される際に、西欧の人々の関心に適応して、西欧の名前を与えられたと考えられる」としている⁴²。

4	Sancta Marias, white	1s6d
6	Small white women	3d
4	White cocks	1s6d
4	White josses	1s0d
4	Birds with rocks	9d
2	White griffins	5s0d
2	Horsemen	4s0d
4	Small lyons	6d
6	White chocolate cups	4d
243	Toys	$\frac{1}{2}$ d

(図10)1706年4月、イギリス東インド会社販売記録

しかし、ここで聖母像の名称として英語圏において一般的であるThe Virgin and Childではなく、宣教師が用いていたポルトガル語のSancta Mariaという表現が用いられている点は重要であり、これらの像と宣教師との関係が窺われる。

このように宣教師の影響が窺われる観音像をめぐっては、ブルーメンフィールドによって、フィリピンの市場向けに輸出されたものとして、17世紀後半に中国・徳化窯で制作されたとされる白磁の観音像(図11)が紹介されている——Blumenfield, Robert H. *Blanc de Chine: the great porcelain of Dehua*, Ten Speed Press, California, 2002——⁴³。ここでは、中国とフィリピンのあいだの貿易が注目されている。16世紀、中国の通貨の主な原料は銀であったが、当時、国内で供給できる銀が枯渇していた。こうしたなか、イSPANアメリカの銀を運ぶ船が、メキシコのアカプルコからフィリピンのマニラに來航していたことから、フィリピンと中国の貿易が行われた。フィリピンでは中国・徳化窯で製造された磁器が数多く出土している。

一方、1593(文禄2)年以降には、日本と呂宋のあいだで渡航制度が成立している。日本から呂宋への渡航は許可状の携行が必要であったが、その許可状を発給する役割を担っていたのは宣教師であった。呂宋では日本から來航する侵寇船が問題となり、日



(図11)《観音像》、17世紀後半

本人の処遇は宣教師の紹介状を携行しているか否かで明暗を分けていたという⁴⁴。1597(慶長2)年に日本のセミノリオで制作された銅版画《セビリアの聖母》を含む2点の聖像画がマニラの修道院に伝わっており、開国後にマニラに立ち寄ったプティジャン神父によって発見されている。なお、この銅版画の木版による模刻が、中国でマテオ・リッチによって推薦されたキリスト教関係の図像が掲載された『程氏墨苑』(1604年/万曆32年)に収録されている。

中国・徳化窯で製造された白磁が「サンクタ・マリア」として潜伏キリシタンの手に渡ったとすれば、アジアにおける宣教師の活動の重要な拠点の一つであったフィリピン・マニラを経由して、日本にもたらされた可能性が考えられるのではないだろうか。当時、フィリピンにおいては、中国・徳化窯で製造された白磁の観音像がSancta Mariaとして流通しており、その中には先に見た聖母像(図11)のようにキリスト教の聖母子像に近い作例もあった。恐らく、このような像は禁教下の日本では取締りの対象となる危険があることから、潜伏キリシタンの手に渡ることはなかったと思われる。一方、一般的な白磁の観音像の場合、外見上は「観音像」であることから、取締りの対象となるのを免れたのではないだろうか。しかし、本論で指摘したように、一見するとキリスト教的要素を含まないようであるこれらの像に

も、西洋人風の容貌で描かれた従者や水瓶のモチーフといった、宣教師がもたらしたキリスト教の図像との関係が窺われるものが含まれるのであった。そして、潜伏キリシタンたちが、これらの像を「観音」ではなく、「ハンタマルヤ」と呼んで受け継いできたことは、外見上は「観音」であるこれらの像が、彼らの「サンクタ・マリア」にほかならないことを証している。

おわりに

東京国立博物館所蔵のキリシタン関係遺品のマリア観音像は、1856(安政3)年の浦上三番崩れの際に、浦上村のキリシタンたちが所有していたものを長崎奉行所が没収したものであった。これらの像はのちの時代に研究者によって「マリア観音」という呼ばれることとなるが、これらを所持していたキリシタンたちは「ハンタマルヤ」と呼び、信仰生活の中で先祖代々受け継いできた。そして、開国後に再び西欧からもたらされた聖母マリアの像を前にしたキリシタンたちは、これを「善かサンタ・マリア様」と呼び、禁教下に彼らが信仰のために用いた像と同じ「マルヤ(マリア)」の名で尊んだ。

東京国立博物館所蔵の白磁製観音像は、中国有数の窯業地として隆盛した中国・福建省南部に位置する徳化窯で、17世紀に製造されたものであると記録されている。徳化窯産の白磁は「ブラン・ド・シーヌ(Blanc de Chine, 中国白)」と呼ばれ、国内外で高い評価を受けていた。これらの白磁製観音像をめぐっては、一般に禁教下にキリシタンたちが、表面上仏教徒を装うために信仰したものであり、仏教の観音像に聖母マリアを見立てて拝んだものと考えられてきた。しかし近年の研究では、こうした従来の見方が見直され、中国から日本にもたらされた観音像は、聖母マリアとしてキリシタンたちの手に渡っていた可能性が指摘されていた。

こうした近年の研究をふまえ、本論では中国から国外に輸出されたブラン・ド・シーヌの白磁製観音像に注目し、これらの中にはヨーロッパの聖母子像

に近い作例も含まれていることを確認した。さらに、イギリス東インド会社の販売記録には、しばしば日本の潜伏キリシタンが用いていたのと同じSancta Mariaという言葉が記載されていた。中国において、恐らく宣教師の影響のもと、こうしたキリスト教的要素を含む観音像が作られており、これらはSancta Mariaとして流通していた。そして、これらの白磁製観音像のうち、外見上は「観音像」であり、取締りの対象となるのを免れたものが、当時アジアにおける宣教師の活動の重要な拠点の一つであったフィリピン・マニラを経由して、キリシタンたちの手に渡り、「ハンタマルヤ」として受け継がれてきた可能性があると考えられる。

註

- 1 本論では、マリア観音の概念について表す場合は「マリア観音」とし、作品または作品群を示す場合は「マリア観音像」と表記する。
- 2 安高啓明「キリシタン資料の真偽性」『海路——海港都市の発展とキリスト教受容のかたち——』展覧会カタログ、西南学院大学博物館、2014年所収。
- 3 信者の大量摘発事件を「崩れ」と呼ぶ。浦上村では、1790(寛政2)年に浦上一番崩れ、1842(天保13)年に浦上二番崩れ、1856(安政3)年に浦上三番崩れが起こり、明治に入って1867(慶応3)年に浦上四番崩れが起こった。
- 4 『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』東京国立博物館、2001年。
- 5 田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、1954年、7-9頁。
- 6 片岡弥吉『かくれキリシタン——歴史と民俗』NHKブックス、1967年、243-244頁。
- 7 越中哲也『長崎文化考 其の一』長崎純心大学博物館研究第七輯、1999年、8頁。
- 8 片岡弥吉「浦上異宗徒一件」、谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第十八巻 民間宗教』三一書房、1972年所収。
- 9 田北、前掲書、76-163頁。
- 10 呂宋国(フィリピン)とキリシタンとの関係を示す史料として、「ろそんのおらしょ」がキリシタンのあいだに伝承されている(上掲書、122頁)。
- 11 浦川和三郎『切支丹の復活(前篇)』日本カトリック刊行会、1927年、236頁。
- 12 竹村覚『キリシタン遺物の研究』開文社、1964年、104頁。
- 13 西村貞『南蛮美術』講談社、1958年、15頁。
- 14 安高、前掲書、52頁。
- 15 安高啓明『歴史のなかのミュージアム——驚異の部屋から大学博物館まで』昭和堂、2014年、94-98頁。
- 16 東京国立博物館所蔵のマリア観音像と同じ作例のものであれば、順じて扱うこともできるが、何より当時の口書が重要である。したがって、マリア観音を博物館資料として扱う上では、文献資料や美術史、

- 民俗学的調査により、確証が得られないマリア観音像については、「伝」を付けるのが最も適切な処置である(安高啓明「キリシタン資料の真偽性」西南学院大学博物館、前掲書、50-52頁)。
- 17 上掲書、52頁。
- 18 田北、前掲書、65頁。
- 19 上掲書、10頁。
- 20 前掲書、10頁。
- 21 前掲書、65-66頁。
- 22 内山善一ほか『キリシタンの美術』宝文館、1961年、185頁。
- 23 東京国立博物館、前掲書、167-171頁。
- 24 『仏像 中国・日本——中国彫刻2000年と日本・北魏仏から遣唐使そしてマリア観音へ』展覧会カタログ、大阪市立美術館、2019年、199頁。
- 25 ダントコール『中国陶瓷見聞録』小林太一郎訳注、平凡社、1979年、242-243頁。
- 26 景德鎮窯の白磁は、うっすらと青みを帯びた透明感のある「青白磁(影青・インチン)」で知られる。マリア観音の造形的特徴による分類を行い、様式の変遷を調査・研究している原千夏氏(東京藝術大学大学院美術研究科)は、「東京国立博物館所蔵のものについても、中国・徳化窯以外の生産地の可能性も含めて再調査を行う必要がある」と指摘している。
- 27 本像(目録記載番号C624)は徳化窯産として記録されているが、付属書簡の記録中に「肥前三河地(ママ)焼右所持商人今村屋忠右衛門」との記載がある(東京国立博物館、前掲書、170頁)。
- 28 大阪市立美術館、前掲書、199頁。
- 29 上掲書、200頁。
- 30 前掲書、200頁。
- 31 前掲書、200頁。
- 32 若桑みどり『聖母像の到来』青土社、2008年、366-370頁。
- 33 Laufer, Berthold. 'The Chinese Madonna in the Field Museum', Walravens, Hartmut. ed., *Kleinere Schriften von Berthold Laufer. Teil 2, Publikationen aus der Zeit von 1911 bis 1925*, Sinologica Coloniensia, Bd. 7, Franz Steiner Verlag, Wiesbaden, 1979, S. 393-400.
- 34 若桑、前掲書、369-370頁。
- 35 Donnelly, P. J. *Blanc de Chine : the porcelain of Têhua in Fukien*, Faber, London, 1969, pp. 194-198.
- 36 *ibid.*, p. 196.
- 37 ドネリーはこれらを「ゴシック様式の髪型」と称している(*ibid.*, p. 196)。
- 38 Ayers, John. "Blanc-de-Chine: Some Reflections." *Transactions of the Oriental Ceramic Society 1986-87*, 1986, p. 29.
- 39 Ayers, John. *Blanc de Chine: Devine Images in Porcelain*, China Institute Gallery, New York, 2002, p. 99.
- 40 Godden, G. A. *Oriental Export Market Porcelain and its influence on European wares*, Granada, London, 1979.
- 41 *ibid.*, pp. 257-280.
- 42 *ibid.*, p. 261.
- 43 Blumenfield, Robert H. *Blanc de Chine: the great porcelain of Dehua*, Ten Speed Press, California, 2002, p. 180.
- 44 清水有子「呂宋貿易におけるキリシタン宣教師の役割」『研究キリシタン学』13号、キリシタン学研究会、2011年、1-30頁。

[挿図出典]

- (図1)岡部駿河守(長崎奉行)成『異宗一件』、国指定重要文化財、1860(萬延元)年、長崎歴史文化博物館所蔵(長崎歴史文化博物館より提供)。
- (図2)《マリア観音像》、17世紀、西南学院大学博物館所蔵。
- (図3)『絵葉書・浦上天主堂内史料陳列室ノ一部』、長崎歴史文化博物館所蔵(長崎歴史文化博物館より提供)。
- (図4)《中国風聖母子》、明代末期、シカゴ、フィールド美術館所蔵(フィールド美術館ホームページ)。
- (図5)《聖母子像》(1675-1725年)(Donnelly, P. J. *Blanc de Chine : the porcelain of Têhua in Fukien*, Faber, London, 1969, Plate 122C)。
- (図6)ブラウ、中国・雲南省地図(部分)、1655年(Blaeu, Joan. *Novus Atlas Sinensis 1655 : Faksimiles nach der Prachtausgabe der Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel*, Müller und Schindler, Stuttgart, 1974)。
- (図7)《観音像》、17世紀前半-中頃、リッチモンド、バージニア美術館所蔵(Ayers, John. *Blanc de Chine: Devine Images in Porcelain*, China Institute Gallery, New York, 2002, p. 99)。
- (図8)《マリア観音像》(C612)、国指定重要文化財、17世紀、徳化窯、長崎奉行所旧蔵品、東京国立博物館所蔵(Image: TNM Image Archives)。
- (図9)《マリア観音像》(C602)、国指定重要文化財、17世紀、徳化窯、長崎奉行所旧蔵品、東京国立博物館所蔵(Image: TNM Image Archives)。
- (図10)1706年4月、イギリス東インド会社販売記録(Godden, G. A. *Oriental Export Market Porcelain and its influence on European wares*, Granada, London, 1979, p. 277)。
- (図11)《観音像》、17世紀後半(Blumenfield, Robert H. *Blanc de Chine: the great porcelain of Dehua*, Ten Speed Press, California, 2002, p. 180)。

